

# 身体主義にもとづく , 主格の認知意味論

著者	竹内 義晴
雑誌名	ドイツ文学
巻	104
ページ	65-77
発行年	2000-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/2287">http://hdl.handle.net/2297/2287</a>

# 身体主義にもとづく、主格の認知意味論

竹 内 義 晴

## 1. 格を巡る問題と身体主義・認知論的人間観

言語を記号主義的にとらえる従来の言語研究では、形態論的に区別される名詞の格のそれぞれに統一的な意味を割り振ることはできない、と考えられてきた (Fillmore 1968, Rauh 1988)。一方で私たちの言語直観は、理論でどう説明されようと、これらの形態論的な格のそれぞれに何らかの統一的な意味のまとまりを感じ取っているように思われる。近年、身体経験を中心に据えたメタファーを手がかりにした、身体主義・認知論的な人間研究によって、心の成り立ちがより具体的にとらえられるようになってきた (Lakoff/Johnson 1999)。この論文では、そのような新しい人間観を踏まえ、ドイツ語の主格の意味が、認知論的にとらえられる主体の概念の反映であるという主張を展開する。

## 2. 主格に割り振られると考えられるさまざまな意味役割

主格の名詞句には次のような意味役割の一つが与えられると説明されることが多かった。

動作主 / 経験主 / 所有主 / 道具 / 経路 / 原因 / 位置を占めるもの / 状態(の変化)の帰属主 / 心的状態(の変化)の帰属主 / 行為の受け手 / 推論の根拠 / 心的指向の目的 / コープラで指定される対象 / コープラで結合される対象 / 名前の帰属主 / 職業の帰属主 / コープラで結合される職業 / 主題の提示 / 語りかけの対象 / 意味なし

## 3. 主格固有の意味の存在を示唆するいくつかの論点

しかし、以下に示す論点は、主格の背後には何か、全体として一つのものとして働いている、意味のまとまりが存在している可能性を示唆している。

### 3.1. 主格には意味が多重に割り振られる

私たちの脳の働きの基本は並列分散処理的であり、これは神経回路網としての脳の基本的な性質である。並列的な分散処理では、それぞれの処理を見るとバラバラのことをしているようであるが、しかし全体としては、あるまとまりのあることを行なっている。並列分散処理が脳の働きの基本だと考えると、一つの形態論的な格の使用例に複数

の、直接には相互に関連しないと思われる意味が割り振られ、しかし、その背後には何らかのまとまりをなす認知の働きがあるということがあってもおかしくはない。むしろ、その方が並列分散処理の仕組みにかなっている。

Fillmore (1968) 以降、主格の名詞句のそれぞれの使用例には、動作主や経験主など、一つの意味役割が割り振られるべきだと考えられることが多かった。しかし、その主格が同時に主題の提示の役割を果たしていると受け取られることも自然である。特に受動の主語は、行為の受け手であると同時に、主題の提示をしていると受け取られることを意図して使用されることが多い。<sup>1)</sup>

- (1) Zuerst baute man einen Sockel
- (2) Die Ruine sehen Sie hier vor sich.
- (3) Die gesamte Menschheit wurde gezwungen, . . .

動詞 *gefallen* の主語は心的指向の目的を表わすと考えられるが、心的指向の目的と、心的指向の原因とが単純に区別できるわけではない。この双方は同じ対象に同時に認められるのである。バッグに私の嗜好が向いているのは、同時に、バッグが私をひきつけているのでもある。*gefallen* という動詞には、嗜好という私たちの認知の双方向性が反映されている。*Du gefällst mir nicht*<sup>2)</sup> のような、人が主語の表現であっても、主格名詞句の *du* は、私の関心の目的であり、関心を引き起こす原因であって、経験主などではない。

- (4) Die Tasche gefällt mir.

二人称主語は、動作主や経験主であると同時に、語りかけの対象であったりする。また、経験主の経験には、自己の判断や主体性が関与する場合がある。見えるというのは、目を開いていれば見えてしまうという自動的経験である。しかし、目をつぶったり、よそ見をしたりしては、見てほしいものが見えないから、話し手は「見てください」と頼むのである。その意味で、動詞 *sehen* の主語には、自己意志による動作の動作主の側面もある。

- (5) a. Sehen Sie, meine Damen, diese Höhlung.
- b. Nein, sie sehen die nicht, sie wollen die nicht sehen.

動詞 *sehen* の主語に動作主的な読みが現れるのは、二人称主語の場合だけではない。(5b) を見ると、文脈によって、*sehen* という経験の自己意志による動作という隠れた側面が、浮かび上がってくることがわかる。視覚という経験は、眼球とその関連機構によ

1) ここでは「主題」という術語をおよそ、「取り上げられる話題の中心」のような意味で使っている。

2) 「あなたの顔色が悪くて気に入らない」と医者が患者に言うような設定でだけ用いられる。

る視線の方向の設定, 焦点合わせ, 入力刺激のコントロールなどの身体的条件に基づいている。この経験の全体を前提とした上で, *sehen* という動詞では, 通常は, 自動的经验という側面が前面に出て, 自己意志による動作という側面は背景に引っ込んでいる。だが, 条件によっては, 背景に引っ込んでいた認知的側面が表面にでてくるのである。

### 3.2. 主語などの構文的要素の意味解釈への影響

ドイツ語についてではないが, 心理学者の実験は, 動詞の意味とは独立に, 主語などの格に意味解釈を決定する力があることを示唆している (Naigles/Gleitmann/Gleitmann 1993)。実際には存在しない無意味動詞を使った他動詞構文と自動詞構文の二つの例文を子供に聞かせる。そうすると, 子供は, それぞれの例文を聞かされた場合, 他動詞構文では, 動作主が他の対象に働きかける, 他動的な動画を長く見つめ, 自動詞的な構文では, 動作主が一人で何かする, 自動的な動画を長く見つめたというのである。

また, 自動詞を他動詞的に, 他動詞を自動詞的にと, それぞれ不適切な構文に組み込んだ例文を聞かせ, 人形を使って意味を再現させる。そうすると, 小さな子供でも一応理解していると考えられる *come* や *put* などの基本動詞を使った文でも, 構文に影響された意味の再現をすることが多かったのだという。特に, 自動詞を他動詞構文に使った場合, 多くの被験者が他動的な動作を再現することが多く, また, 他動詞を自動詞構文に使った場合にも, 自動的な動作を再現させる反応がかなり出たのだという。

この実験は英語についてであって, 他の言語についてはどうなのかなど, まだまだ他の研究を待つ必要がある。しかし, 私はここで, 構文に意味の再現が影響されるという単純な事実に注目したい。構文というのはこの場合, 主語が主語として, 目的語が目的語として, 出現する, しないということである。そのことによって, 大人でも 30%~50% もの被験者が, よく知っているはずの基礎動詞の意味を他動詞的な意味から自動詞的な意味へ, そして自動詞的な意味から他動詞的な意味へと再構成し直すというのは興味深い。

この実験からは少なくとも, 英語の話し手は, 主語や目的語についてなんらかのイメージを持っていることが分かる。子供の場合, すでに文法的な骨組みは獲得されているが, 語彙の辞書記述などについての自分の言語知識には確信が弱いのだろう。そのような場合には, より強く主語や目的語についてのイメージに引きずられて言語表現が解釈されるのだろう。他動詞構文では, 主語と目的語の二つの構文的要因があるのだから, 主語一つだけの自動詞構文におけるよりも, より構文的な影響が強いのだろう。

### 3.3. 主格は対象を提示する

Valentin (1998) は同格名詞句や, テキスト中に挿入される名詞句の例によって, 主格という格の特殊性を示している。主格名詞句は先行名詞句と同じ格でなくても, 同格名詞句として挿入することができ, また, テキスト中にいきなり挿入することもできるのである。このような現象は与格にもみられるが, 所有格, 対格にはみられない。

(6) Dieser Kerl, dem werde ich es noch zeigen.

(7) Dann gibt es dort noch den Durian, eine ganz besondere Delikatesse: ...

Valentin は、呼び掛けに使われるものも含めて、動作主や経験主などを表示しない主格を、話し手があるものごとをテキストに提示する格であると主張している。

### 3.4. 主格は際立ちを表わす

Schecker (1998) の実験では、被験者が自転車を取られた設定では、自転車が主語の文 (8a) の方が、不特定の自転車泥棒が主語の文 (8b) よりも圧倒的に多く選ばれたという。

(8) a. Mein Fahrrad ist weg.

b. Man hat mir das Fahrrad gestohlen.

また、今朝口論した上司から食事に誘われた、と同僚から聞いた、という想定では、上司が主語の文 (9a) ではなく、同僚が主語の文 (9b) を選ぶ被験者が圧倒的だったという。

(9) a. So, so, und heute morgen hat er sich noch mit Ihnen gestritten, daß die Fetzen geflogen sind.

b. So, so, und heute morgen haben Sie sich noch mit ihm gestritten, daß die Fetzen geflogen sind.

Schecker は、ことがらの認知の上で際立つ Figure の部分が主語になるのだと主張している。盗まれた自転車を主語にするのは、それを際立たせたいのである。午前中に激しい口論をした、その上司から食事に誘われる同僚を主語にするのは、同僚のことを心配するからである。上司がまたトラブルに巻き込まれることが心配なのだったら、(a) の例文を選ぶだろう。認知的に際立ったものが主語になる、というのが Schecker の主張である。

### 3.5. エピソードの中心人物が主格で表現される傾向

人間の認知活動は脳による情報処理であり、情報を蓄え操作する記憶の働きは非常に重要だと考えられている。記憶の働きについては、意味記憶とエピソード記憶が区別される (Turving 1972)。私たちの記憶には、知識を項目として個別に蓄える百科事典のような働きがあり、このような記憶は意味記憶と呼ばれる。他方、私たちは、一つの事件を、時間軸にそって継起する小さな事件の、何らかのまとまりある連続として記憶する。こちらの記憶は、その内容が小説や物語に似ていて、エピソード記憶と呼ばれる。

例えば、狩猟について、道具、方法、狩猟対象などの個別的、百科事典的な知識が蓄えられていなければならない。しかし、それだけでは、野生の獣を狩るための実際的な知識にはならない。私たちには、さまざまな知識を、自分の経験として、物語のように

まとめあげて蓄えていることが重要なのである。エピソード的にまとめあげられた記憶を使うことによって、私たちは、経験によって獲得した知識を次の機会に活かし、また、仲間に分かりやすく伝えることができるのである。このような意味で、エピソード記憶は、人間にとって非常に重要な役割を果たしている。人間が、物語という、エピソード的情報を言語的に表現するテキスト形式を非常に重要なものとしてきたのには理由があるのである。

物語的なテキストでは、エピソードの中心になる人物や物が主語になる傾向がある。例えば、以下の M. Ende の Momo からの抜粋は、ほら話しを控えなくてはならない人物のエピソードである。ここでは、その人物、ジジがまず主格である。このエピソードには、さらに、二人のアメ리카人女性が彼に案内を頼んだというサブエピソードが埋め込まれているが、そこでは彼女たちが主格である。さらに、そこに埋め込まれた、ジジが彼女たちを驚かすサブエピソードでは、ジジが主格。そして、さらにそこに埋め込まれた、ジジが彼女たちにほら話しをするサブエピソードでは、もう一度ジジが主格になっている。<sup>3)</sup>

- (10) Im Gegenteil, er mußte oft sogar versuchen, sich zu bremsen, um nicht wieder zu weit zu gehen wie jenes eine Mal, als die beiden vornehmen, älteren Damen aus Amerika seine Dienste angenommen hatten. Denen hatte er nämlich keinen schlechten Schrecken eingejagt, als er ihnen folgendes erzählte.

(M. Ende: Momo からの抜粋)

エピソードにはサブエピソードが埋め込まれているという、再帰的、重層的なエピソード構造では、それぞれのエピソード単位での中心人物が主格になる傾向が強い。

#### 4. 身体主義的、認知論的にとらえられる主体概念と主格

私は以下で、認知的な意味での主体を中心に構成される人格(主体的人格)が、主格という文法上の格に投影されているのだ、と主張したい。Lakoff/Johnson (1999) による、自分の内面 (inner life) についての議論を踏まえて、認知論的な主体的人格とは何かという議論を展開し(4.1)、そのような主体的人格が主格に投影されていることを示す(4.2)。

##### 4.1. 身体主義・メタファー論的にとらえられる主体的人格という認知的まとまり

自分が自分であるために、私たちは特に、自分が主体であると認識し、自己の身体や、意識における活動のすべてを自己としてまとめあげる心の働きが重要であると感じ

3) 例えば、彼女たちを中心にすえたサブエピソードを挿入したくなければ、anbieten などのジジを主格にする動詞をつかってテキストを構成することもでき、その場合には、このエピソード全体の組み立ては、もっと平板なものになってしまっただろう。

ている。この心の働きが失われてしまえば、人格を支える私たちの主体的精神活動は失われてしまう。その意味で、私たち人間は自分の心の働きについて関心を払い続けてきた。Lakoff/Johnsonによれば、私たちは、「自分の内面 (inner life)」というものを作り上げ、理解するために、主体と自己 (Subject-Self) というメタファーに依存してきた。主体とは、私の意識、経験、理性、意志、そして私を私とさせている本質の座であり、自己とは、肉体、心、社会的役割、過去、未来など、私にかかわるすべてである。自己とは、分裂・矛盾し、統一がとれないこともあり、唯一の自己があるわけでもない。私の主体はそのような自己と向かい合いながら自分の内面というものを成り立たせている。ここではそのような自分の内面のことを「主体的人格」という認知的なまとまりであるとする。

私たちは自分の主体的人格を、主体と自己が向かい合う関係として理解している。個人として擬人化された主体が自己とさまざまに関与するというメタファーを使って、私たちは自分の内面、心、自分の人格というものを理解しているのである。この関係においては、(11a-e)の5種類の経験が基底にあるのだと彼らは主張する。私は、この5種類の経験に、さらに3種類のもの(11f-h)を付け加えなくてはならないと考えている。以下に、この8種類の経験について、私は便宜のため名前をつけ、簡単に解説する。

- (11) a. 身体をコントロールし、外界の対象を操作すること(随意行動): 自分自身を随意にコントロールして、自分と自分以外に影響がおよぼせる。これが自分ということの基本なのだ。この確信と経験がなければ、主体的人格というものはいない。
- b. 空間で位置を占めていること(空間定位): 自分の占める位置について何かの確かな認識を持てることが重要である。このことから、私たち、肉体を持った存在として進化してきた動物は逃れられない。
- c. 社会関係に関与すること(社会関与): 社会性を喪失することもまた、人格崩壊の現れである。私たちは、複雑な諸社会制度を熟知し、その関連において適切に振るまいながら、社会に関与し、そのことによって私たちの主体的人格を確立している。
- d. 他者に共感すること(自己投影): 私たちは他人のことを分かたり、または分かたつつもりになったりする。このような自己投影の心の働きがなければ、そもそも動物は、敵の襲撃を予測して回避したり、自分に関心を持っている交尾の対象の当てをつけて働きかける、などの種の保存行動ができずに、絶滅してしまう。
- e. 自己の本質 (essence) を持っていること(自我意識): 私たちは、自分には自分を自分たらしめている本質が何かあると思っている。それで、「自分探しの旅」をしたり、「自分を見失なった」気がしたりするのである。この確信がなければ、人生に意味があるとは思えず、無気力におそわ

れてしまうに違いない。

- f. 自己の状態がわかること(自己認識): 私たちは、自分自身の状況を監視(モニター)している。ここからの情報によって、自分の行動が計画できるのである。
- g. 外界を受け止めていること(外界受容): 私たちも、私たちを取りまく外の世界も、物理的対象と、そこに基礎をおく精神によって作られている。私たちが外の世界に働きかけ、インタラクトできるのは、そのような外界を受容できているからである。
- h. 自分に帰属している対象があること(対象所有): 猿には、自分の餌を他の猿が取るのを許す行動が見られるという。対象を所有しているという経験は、少なくとも人間にとって非常に根源的なものであり、社会経験の相当部分を基礎づけている。

これらの基本的な経験を背景に、主体が自己と関与するというメタファーを使って、私たちは自分の主体的人格についての理解を成り立たせている。そして、これらの基本的な経験は結局のところ主体の人格の基底にあって、その時々状況に応じて臨機応変に使われる原理なのだと私は考える。人間は、これらの原理を組み合わせたり、選択、乗り換えなどをしながら、柔軟に状況に対応し、進化の歴史を乗り越えてきたのだろう。

#### 4.2. 主格の意味は主体的人格の投影である

主体の人格という認知的まとまりの成り立ちを前項(4.1)で提示した。この主体的人格が文法的な主格に投影されている、ということをこの論文では主張する。まず、この主張によって、(4.1)で示した主格のさまざまな意味の読みが派生できることを示す(4.2.1)。さらに、この主張が、(3.1-5)で示した、主格には何らかの意味のまとまりがあることを示唆するいくつかの論点と整合性を持っていることを示す(4.2.2)。

##### 4.2.1. 主格のさまざまな意味の読みの派生

主体と自己のメタファーによって確立されている主体の人格という認知的まとまりでは、8種類の基本的な原理が働くという議論をした。少なくとも、ドイツ語についての主格の意味の割り振りの多くが、主体の人格という認知的まとまりにおいて働くこれらの基本的な原理によって説明できると私は考える。<sup>4)</sup>

随意行動の原理からは、動作主の読みが導かれる(1)。自分の意志で自由に行動できるということは主体の人格が確立していることのための大きな核の一つなのである。

原因(12)、道具(13)、経路(14)の読みの例文では、それぞれ、主格の名詞が擬人化

---

4) 以下、重複する例文は番号によって示す。



されているから、reizen, öffnen, führen という、人を主語にする動作動詞を使うことができる。擬人化の結果、随意行動の原理が働き、主格名詞は動作主として読まれる。しかし、この場合の動作主というのは、擬人化された結果の解釈であり、実際に動詞の意味との関連で表現されるのは、原因、道具、経路なのである。<sup>5)</sup>

- (12) Ihn reizt eine schöne Idee.
- (13) Der Schlüssel öffnet die Tür.
- (14) Die Straße führt bis zum Bahnhof.

推論の根拠(15)、心的指向の目的(4)の例文では、bedeuten, gefallen という人を動作主にしない動詞が使われていて、擬人化による説明はできない。しかし、これらの二つの動詞は、ことがらが人物の心的状態(確信, 好み)をひき起こすという意味で、どちらも、原因-結果の連鎖を表現している。この連鎖の内の原因の部分、随意行動の原理によって動作主としての主格に写像されるのだが、実際には動詞が表現する、原因-結果の連鎖の内容との関連で、推論の根拠や心的指向の目的という読みが導かれるのである。

- (15) Was soll das bedeuten, daß er heute kommt?

同様に、所有主(16)の読みでは対象所有の原理、経験主(2)の読みでは外界受容の原理、位置を占めるもの、(17)の読みでは空間定位の原理、状態(の変化)の帰属主(18)や心的状態(の変化)の帰属主(19)の読みでは自己認識の原理が働いていると考え、それぞれの読みが主体的人格の投影として説明できる。もちろん、それぞれの文で使われている動詞の意味などの要因もまた、これらの読みを成り立たせることに大きく関与している。

- (16) Ich habe auch das Buch zu Hause.
- (17) Sie stehen doch darauf.
- (18) Die neue Welt war schließlich fertig.
- (19) Der grausame Tyrann mußte erkennen, daß...

名前の帰属主(20)と職業の帰属主(21)の読みでは、社会関与の原理が働いている、と考えられる。我々の社会生活では、それぞれの人格は、名前や職業によって同定され、アイデンティティを確立する傾向が強い。そのような名前や職業にかかわる社会関係では、主体的人格というのは、普通に考えると名前の帰属主と職業の帰属主なのである。

---

5) (13)の例文は、非文法的だとする議論がある。しかし、私の調査では、「問題なし」の判断を下したインフォーマントが多数派だった。ただし、この場合、解釈の可能性について「他でもないこの鍵」のような限定が加えられるが、この論文での議論については、それで何の問題も生じない。

(20) Er heißt Gigi.

(21) Ich bin Student.

以上の例では、主格の名詞が話し手 (ich/wir) でないことが多いのであるから、厳密な意味では、私という主体的人格の投影とはいえない。ここでは、同時に自己投影と自我意識の原理が働いているのである。話し手も聞き手も、基本的には自分の主体的人格を主格の名詞句に投影する。この、自分の主体的人格が投影された対象について、「一番大切なのは自分なのだ」という自我意識の原理が働くと、その対象は認知的に際立つのである。

同様に、自己投影、自我意識、そして空間定位の原理が働いているのが、コープラで指定される対象 (22) と行為の受け手 (3)、語りかけの対象 (5) と主題の提示 (23) の読みである。自己投影と自我意識の原理によって、特に主格の名詞句には認知的な際立ちが与えられる。

(22) Die heutige Welt ist der neue Globus.

(23) Momo (物語のタイトル)

(24) のような例文中の形式主語の es については、「意味がない」などと言われるが、私はそうは考えない。ここでは空間定位の原理が働いているのである。<sup>6)</sup> 形式主語には意味がないのではなく、文によって表現される内容について、談話の場、または談話で想定される話題の場のどこかにその場所を定める働きをするのである。形式主語の es は、文頭に場所を表わす副詞的表現が来たりして、構文的に指定される文頭の主題の位置から外れる場合には、省略や短縮されることがあり、場合によっては省略されなくてはならない場合もある。このような es の振るまいは、なかなか複雑で、詳細に検討を加える必要があるが、これらの場合、文頭に現れた、場面をセットする副詞的表現によって es の存在する理由が弱められている、という説明の可能性があると私は思っている。

(24) Damals gab es/gab's noch keine Seelenärzte.

コープラで結合される対象 (22)、コープラで結合される職業 (21) の問題は、主格補語の読みの問題である。主格の主語は主体的人格の反映である。それならば、主格主語と主格補語の指示する対象が同一なのであるから、主格主語に反映された主体的人格が、主格補語にもまた引き継がれることに不思議はない。しかし、主格補語には際立ちが付与されることはない。主格主語にすでに際立ちが与えられているので、際立ちが重複することは避けられ、主格補語には、空間定位の原理によって、位置だけが与えられるのである。

6) Smith (1996) はこのことを、場面をプロフィールし、セットする es だとしている。

#### 4.2.2. 認知的な議論としての妥当性の検討

私は、主格には単一の意味格が割り振られるのではなく、意味が多重に割り振られること、そして、そのことは脳の神経回路網としての働きを考えると当然のことなのだ、という指摘をした(3.1)。主格の意味は主体の人格の反映だという主張は、この指摘とうまく折り合う。私は、私たちの心は基本的に多重人格的であり、それはまさに脳の成り立ちに由来しているのだという議論をしたことがある(竹内 1977)。私たちの主体的人格は、場合に応じて、いろいろな顔を、それも多くの場合複数の顔を見せるのである。

Naiges たちの実験を紹介して、「主語である」などの構文的要素によって文の意味解釈は強い影響を受けることを示した(3.2)。彼らの実験では、主格の動詞は使われる動詞の意味に矛盾する場合でも、動作主の解釈を受けやすい。この事実は(怪我や病氣をするたびにづくづ感じる)随意行動の原理の重要さを考えれば、納得のできることである。

主体の人格にとって動作の主体であることは重要なことに違いない。他方、その他の原理によって、主格名詞句の解釈が動作主以外になっても構わない。紹介した実験では、動作に焦点が当たる場面設定だったから、随意行動の原理が働いて当然で、別の種類の場面設定だったら、他の原理が働くことも予測できる。自分が実験心理学者でないのが残念だが、例えば、苦痛に苦しむかわいそうな主人公を無意味他動詞の主語にすえたとしたら、被験者の意識が苦痛の受容に向けられ、自己投影の原理が表に出て、主人公を誰かがいじめるというような、別の結果が出るかもしれない。主格名詞句の背後にある、主体の人格という認知的なまとまりが、主格名詞句のさまざまな解釈を可能にしているのである。

Valentin は、動作主や経験主などに対応しない主格について、話し手がものごとをテキストに提示する役割があるのだと主張した(3.3)。また、Schecker は、主格を際立ちの格であると主張した(3.4)。私の考えでは、主格の、対象をテキストに提示する主格の役割も、際立ちを表わすという役割も、自己投影、自我意識、そして空間定位の原理に由来する。認知主体は、対象に自己を投影し、自分に引きつけたがる、そして、そこに自己が投影されていると考え、注目するのである。主格は一番身近で、一番重要で、しかし、一番当たり前の格である。このことは、自分自身というものが、自身にとって、一番大切でありながら、しかし、一番意識されにくい、矛盾に満ちたものであることと似ている。

エピソードの中心人物が主格で表現される傾向(3.5)もまた、同じように説明される。エピソードの中心人物は「主人公」なのであり、主体の人格の反映である主格で表現するのが自然なのである。さらにここでは、主体の人格について、空間定位の原理が働いている。私たちは、主人公を、あるエピソード空間の中で定位しようとするのである。

## 5. まとめ

身体主義・メタファー論による認知論的な人間観に基づいて、主格は主体的人格の投影であるという議論をしてきた。主格は前置詞や動詞句、形容詞に支配されることがなく、動詞を支配するという、ドイツ語の表層格としては、とびきりに特殊な格である。主格には、私たちにとってなによりも重大な関心事である「私」という主体的人格が投影されていることを考えると、この主格の文法的な特殊さにも納得がいくのではないだろうか。

私はこの論文ではドイツ語の主格が主体的人格という認知的ままとりの反映であるという議論をした。個別言語的な差は当然あるとしても、主格というのは言語にとって最も普遍性が強いものの一つなのではないだろうか。主体的人格が人間にとって最も大切な認知的ままとりの一つであるのなら、それに対して、ある種の文法的な対応者を用意するということは、言語の設計に無理をかけない「とても良い」選択の一つなのには違いない。

## [参考文献]

- Fillmore, Ch. (1968): The Case for Case. In: Bach, E. / Harms, R. T. (eds.), *Universals in Linguistic Theory*. New York: Holt, Rinehart and Winston. 1-90.
- Lakoff, G. / Johnson, M. (1999): *Philosophy in the Flesh: The embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Naigles, L. / Gleitman, H. / Gleitman, L. R. (1993): Children Acquire Word Meaning Components from Syntactic Evidence. In: Dromi, E. (ed.), *Language and Cognition: A Developmental Perspective*. Norwood / New Jersey: Ablex Publishing. 104-140.
- Rauh, G. (1988): *Tiefenkasus, thematische Relationen und Thetarollen: Die Entwicklung einer Theorie von semantischen Relationen*. Tübingen: G. Narr.
- Schecker, M. (1998): Über den Nominativ und die Subjektivierung im Deutschen. In: Vuillaume (1998). 131-139.
- Smith, M. B. (1996): *German Impersonal Construction and the Nonautonomy of Grammar*. Paper presented at the 23rd Annual UWM Linguistics Symposium of Wisconsin-Milwaukee.
- Turving, E. (1983): *Elements of Episodic Memory*. Oxford: The Clarendon Press.
- 竹内義晴 (1997): 「言語表現の意味の背後の思想家たち、意味を支える知識システムについての試論」 In: 『金沢大学文学部論集』第17号, 59-77.
- Valentin, P. (1998): Zur Semantik des Nominativs. In: Vuillaume (1998). 115-130.
- Vuillaume, M. (ed.) (1998): *Die Kasus im Deutschen, Form und Inhalt*. Eurogermanistik 13. Tübingen: Stauffenburg.

## Kognitivistische Kasussemantik des Nominativs

Yoshiharu TAKEUCHI

Für jeden Oberflächenkasus würde keine einheitliche Bedeutungsgröße, sondern eine der möglichen semantischen Rollen (Tiefenkasus) je nach den jeweiligen kontextuellen Bedingungen zugeschrieben. Seit Fillmore (1968) war das die vorherrschende Ansicht der modernen Linguistik. Andererseits aber erwartet unsere sprachliche Intuition eine eins zu eins Entsprechung von Kasusformen und -bedeutungen.

In der heutigen Kognitionswissenschaft ist es möglich geworden, genauer und konkreter zu untersuchen, wie unser inneres Leben gestaltet ist. Lakoff/Johnson (1999) haben erforscht, daß sich unser kognitives Wesen und das Verständnis darüber durch Metaphern vermittelt entwickelt hat und daher metaphorischer Natur ist. Die Metaphern projizieren neuere und abstraktere Erfahrungen auf unsere körperlichen und konkreteren, und geben ihnen Formen, die leichter zugänglich sind.

Wir verstehen uns als eine subjektive Persönlichkeit, die ein eigenes Innenleben führt. Dieses Verständnis basiert auf der Metapher, daß unser Subjekt ein konkreter Gegenstand sei, der den eigenen verschiedenen und oft zueinander widersprüchlichen Selbst gegenübersteht, und mit ihnen in bestimmten Interaktionsbeziehungen steht.

Hinter diesem metaphorischen Verständnis stehen nach Lakoff und Johnson fünf für das Subjekt elementare Erfahrungen:

- 1) wir kontrollieren unsere Tätigkeit nach unserem freien Willen
- 2) wir lokalisieren uns räumlich
- 3) wir stehen in gesellschaftlichen Beziehungen
- 4) wir widerspiegeln uns in anderen Persönlichkeiten
- 5) jede Person besitzt etwas eigenes Essentiales, das sie zu einer würdigen Persönlichkeit macht.

Dazu füge ich noch drei wichtige Erfahrungen hinzu:

- 6) wir beobachten uns selbst
- 7) wir empfinden die Außenwelt
- 8) wir besitzen unsere eigenen Sachen.

Diese acht wesentlichen Erfahrungen wirken nun als wichtige Prinzipien, die unsere subjektiven Tätigkeiten je nach der Situation flexibel in die optimalen

Richtungen leiten.

In dieser Arbeit wird gezeigt, daß die jeweiligen Lesarten (semantische Kasus) des Nominativs je von diesen genannten, für eine subjektive Persönlichkeit wichtigen Erfahrungen vermittelt abgeleitet werden. Damit behaupte ich gleichzeitig, daß es die kognitivistisch erfaßte subjektive Persönlichkeit ist, was als die Bedeutung des nominativen Kasus verstanden werden sollte.

Zum Schluß wird anhand einiger konkreter Diskussionen der kognitiven Wissenschaften gezeigt, daß meine Behauptung in mehrerer Hinsicht unterstützt werden kann.